

「勇気 それは自分で自分を励ますことである」

社会福祉学専攻 小林 雅也（平成 26 年度修了）

1. はじめに

新たに東北福祉大学通信制大学院へご入学をされた皆様おめでとうございます。また、M2へ進まれた方たちは大型連休返上で修士論文の構想レジュメに取り組んでいることと思います。綱渡りをし、よろめきながら何とか修了した自分が熱意に溢れた皆様へメッセージを送ることに戸惑っているところです。具体的な研究方法や論文執筆についてはこの後登場する修了者の方たちに譲るとして、先ずはこの一文が勇気を持つための一助になればと思います。

私は本来であれば最短2年という期間で修了する大学院生活を休学期間も含め、最後の1年で滑り込み、綱を渡り切って修了しています。多くの院生たちが感じるように途中で挫折してしまうのではないか、という不安と焦燥感を感じながらの研究の日々でした。

それでも、こうして語ることができるのは、修士論文の指導教官の三浦俊二先生からいただいたご指導と多くの言葉、事務室職員の方たちの有形無形のご配慮があったからです。この場を借りて心から深く感謝申し上げます。

2. 「探すこと」と「調べること」

さて、今年度入学された方は授業科目を履修しながら研究テーマや研究計画を考え始め、M2の方はレジュメを作成する時期に入りました。ここへ至るまでは「自分の立場や私的な所見に基づく研究動機は相応しくない」など、指導教官からのいくつかのダメ出しやボツを頂戴することになります。

研究テーマが定まると、CiNiiをはじめとした論文検索サイトの利用を中心に先行研究にあたることと思います。また、本学の図書館のほかに地元大学の図書館を活用したり、知己の教員を頼ったりと自身のネットワークを活かした資料収集も有用です。

研究領域の動向について様々な資料にあたるのが重要ですが、先生方からは「研究し尽くされているテーマ」という指摘や、参考文献に対し「このテキストはお薦めできない」などのアドバイスがあり少し動揺することもあります。

3. 「考えること」と「書くこと」

参考文献は文意を押さえ考えながら読むことにはなりますが、論旨に首肯するだけではなく懐疑的な視点を併せ持って読み解いているか、ということが重要です。また、行間紙背に潜む疑義や所見を残すために付箋を貼る、メモを書く、カードを作るなどの作業も大切です。

文章を書くことが不得意と感じられる方もおられると思いますが、章立てを構成し、論旨のアウトラインを描くことができれば論述は苦にならなくなります。三浦先生から「引用しても良いから先ずは沢山書きなさい」、「ボリュームがあれば削ることもできる」などの言葉をいただき、ひたすら書き続けました。一方では「括弧が多いと読みづらい」、「足りない部分は注釈を入れなさい」、「持論、独りよがりな考えを客観的に意味づけする」など論文の読み手を斟酌した指摘も頂戴し、大きく修正・加筆することもありました。

探すことや調べることは考えることに繋がる一連の作業であり、書くことはその総括になります。この流れが途切れると当初の研究計画が崩れたり、論旨がぶれたり、果ては1月の修士論文提出締切日に間に合わなくなります。

修士論文は何より執筆に集中しなければならず、修士論文提出可否の決まる第2回中間レジュメ提出後は追い込み時期に入りますが、論文執筆時期が遅れていた自分は常に追い込み状態でした。余談ですが、執筆中は「論文を書くから日曜日の買い物には行けない」、「愚痴を聴いてあげられない」など家族への一言も必要なようです。

4. おわりに

このメッセージのタイトル『勇氣 それは自分で自分を励ますことである』とは、学位記授与式で萩野浩基学長先生から直接頂戴した言葉をそのまま引いてきたものです。

探すことや調べることは時間の掛かる作業であり、考えることは持続力を要します。書くことは自己の限界への挑戦であるかも知れません。多くの人に支えられる院生生活ですが、修士論文を執筆することは時に孤独だったりもします。その時に自分を叱咤するのは他ならぬ自分であり、不安や焦燥感を統制するのも自分自身です。「～する勇氣」という語を文末に付けるとどんな文章も肯定的になるといいますが、修士論文を書き上げる勇氣を持ち続けることが何より大切だと思います。

紙幅の関係で引き継ぐべき言葉をすべて残すことはできませんが、皆様の研究の成功と一人ひとりの大成をお祈り申し上げ、拙いメッセージとさせていただきます。